昭和45年3月

囲山遺跡

小杉町囲山遺跡緊急発掘調査報告書

富山県教育委員会

例　　言

一、本書は富山県射水郡小杉町大字下条字囲山遺跡緊急発掘調査報告書である。

一、調査は小杉町教育委員会、富山県土木部建築住宅課、富山考古学会の協力のもと、富山県教育委員会が行なった。

一、調査期間は、予備調査―昭和44年８月24日～25日、本調査―昭和44年９月９日～10月10日であり、調査団は別表のとおりである。

　又、調査期間中以下の諸機関の援助があった。記して謝意を表する。

測量器材借用―富山県太閤山住宅団地建設事務所、鴻池組名古屋支店。

発掘器材借用―富山県太閤山住宅団地建設事務所、鴻池組名古屋支店、富山県立大谷技術短期大学。

一、写真撮影は小島俊彰、今井清、谷内尾晋司、狐塚省三、橋本正が行ない、遺構実測図は上記調査員と舟崎久雄、藤田富士夫の原図を橋本がトレースした。

　遺物整理は藤牧あい子、関由利子、柳井睦、酒井重洋、福沢宇太郎、橋本正春、山本　剛、橋本が行ない、実測図は橋本の原図を橋本がトレースした。

富山県教育委員会

囲山遺跡緊急発掘調査団

団長	塩谷敏幸	富山県教育委員会教育長
副団長	中川秀幸	富山県教育委員会教育次長
	黒田外季雄	富山県教育委員会社会教育課長
調査主任	湊晨	富山県文化財専門委員、富山考古学会々長
調査員	岡崎卯一	県立雄峰高等学校教諭、富山考古学会幹事
	京田良志	県立八尾高等学校教諭、富山考古学会理事
	古岡英明	高岡市教育センター、富山考古学会理事
	小島俊彰	県立中部高等学校教諭、富山考古学会理事
	谷内尾晋司	早稲田大学、石川県考古学研究会
	今井清	早稲田大学、富山考古学会
	狐塚省三	早稲田大学、富山考古学会
	橋本正	富山県教育委員会社会教育課、富山考古学会
調査協力員	山内賢一	富山考古学会
	藤田富士夫	立正大学、富山考古学会
	舟崎久雄	立命館大学、富山考古学会
	千成ヶ丘婦人会有志	
	大谷技術短期大学生	
	県立小杉高等学校地歴部	
	県立上市高等学校地歴部	
	県立富山女子高等学校地歴部	
	県立高岡工芸高等学校地歴部	
	県立中部高等学校生徒	
事務局長	有沢宗一	富山県教育委員会社会教育課文化係長
事務局員	社会教育課員	

総　　論

小杉町囲山遺跡は、昭和44年８月20日調査員今井清により、新たに発見された遺跡である。同地は太閤山住宅団地造成敷地内でありその環状線の布設中に露見したわけである。

調査にいたる間及び調査期間中、富山県太閤山住宅団地建設事務所並びに鴻池組名古屋事務所の方々には多大のご協力を受けた。記してその好意に謝意を申し述べたい。

本報告は図録明示を主に作成した。遺跡・遺構・遺物についての論述は後日にその機会を得たい。

二、ニ特記すべきことを記すと、

一、本遺跡は縄文時代前期～晩期、弥生時代後期、歴史時代にまで営なまれた遺跡である。

二、本遺跡で発見された弥生時代後期に属する方形周溝墓群は、裏日本側での現時点分布の北限を示す資料であり、方形周溝墓４基、土壙４基が発見されている（註１）。

三、土壙墓の内、第2～4号土壙墓は周溝を持たず、第２号土壙墓からヒスイ製曲玉、第３号土壙墓から管玉３点、鉄鏃(鉄剣？)（註２）１点が発見され、墓群と直接的関係を示す好資料と言える。

四、多量に発見された弥生式土器は、第４号方形周溝中に集中しており、特別の配列等は認められず、流れ込んだ感が強い。

又、同号には盛土が認められ、その盛土の下に弥生期、縄文期のプライマリーな包含層が認められる（註３）。

五、本遺跡表面は、発掘区域の約半分がブルトーザーにより消除されており、それによって痕跡的に残された時期・形状不祥の遺構が多数検出された。その多くは歴史時代に属するものである。

縄文時代に属す遺構はピットが三ヶ所発見されたに留まる。

六、縄文時代の資料は、その多くが前期中葉頃のものであり、その中から興味ある事象が抽出でき得る（註４）。

発掘調査完了後、同遺跡は環境整備事業を行ない、永久に保存されることとなった。

後日、史跡公園として、大いに興されることであろう。

注１．方形周溝墓第１号～第３号は同一方位を保っており、第３号と第４号は切り合っている。その切り合い関係は４号が後に構築されたことを示している。

土坑は木口板を設けた木棺施設を持っており、１～２、４号は同一方位を保つ。

第３号のみ方位並びに形状が異なる。

註２．形態に対しては鉄鏃としか言いようが無い。特徴として、目釘穴・鉄製の切刃が認められ、全体的には柳葉形となっている。

九州地方で散見される磨製石鏃の一部によく似る。

保存状態も非常に良く、弥生時代に属す鉄器研究の好資料と言えよう。

柄に装着された木部が残存するが、その質は杉材と思われる。

本資料は腰部から、身を下方に向け発見された。

曲玉・管玉等の出土位置から、それが首部に装着されたと仮定すれば、頭位が東方向となる。

註３．従って土坑がローム面に設けられるとすればこの包含層を破損しないかぎり設けられないことになる。

同号及び３号の土坑は未確認である。

註４．土器は多く蜆ケ森式であり、石器としては擦石が多数採集されている。

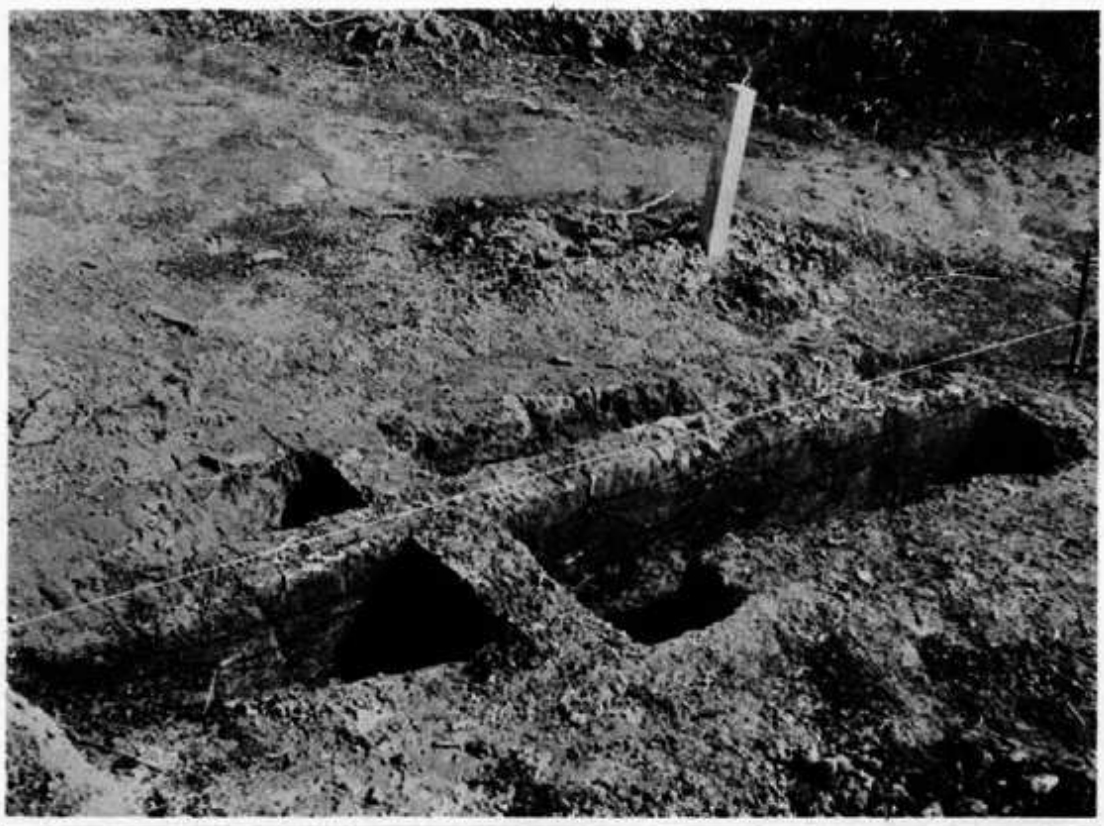
同期の蜆ケ森貝塚とは違う食性を示す。

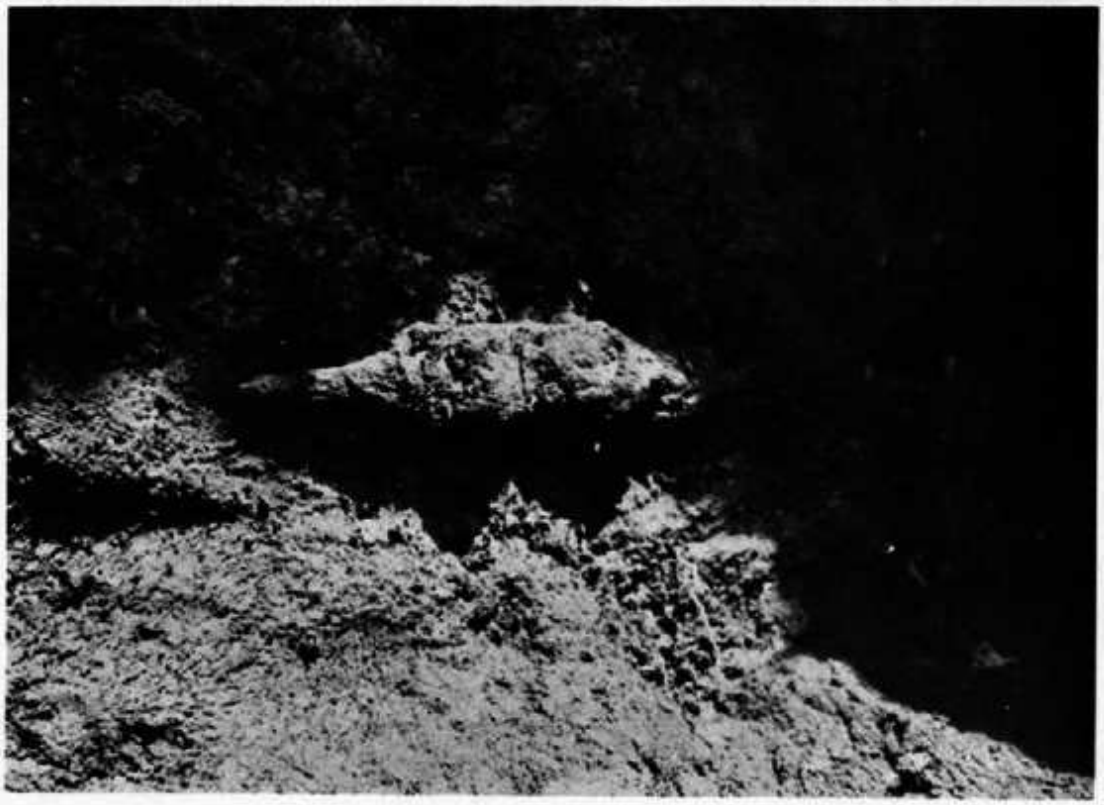
地 形 図

上：遺跡発見現状・予備調査区、下：第4号土坑より西方を望む

上：第1号方形周溝墓・第2号土坑、下：第1号土坑（第1号方形周溝墓内）。

上：第2号土坑、下：第3号土坑。

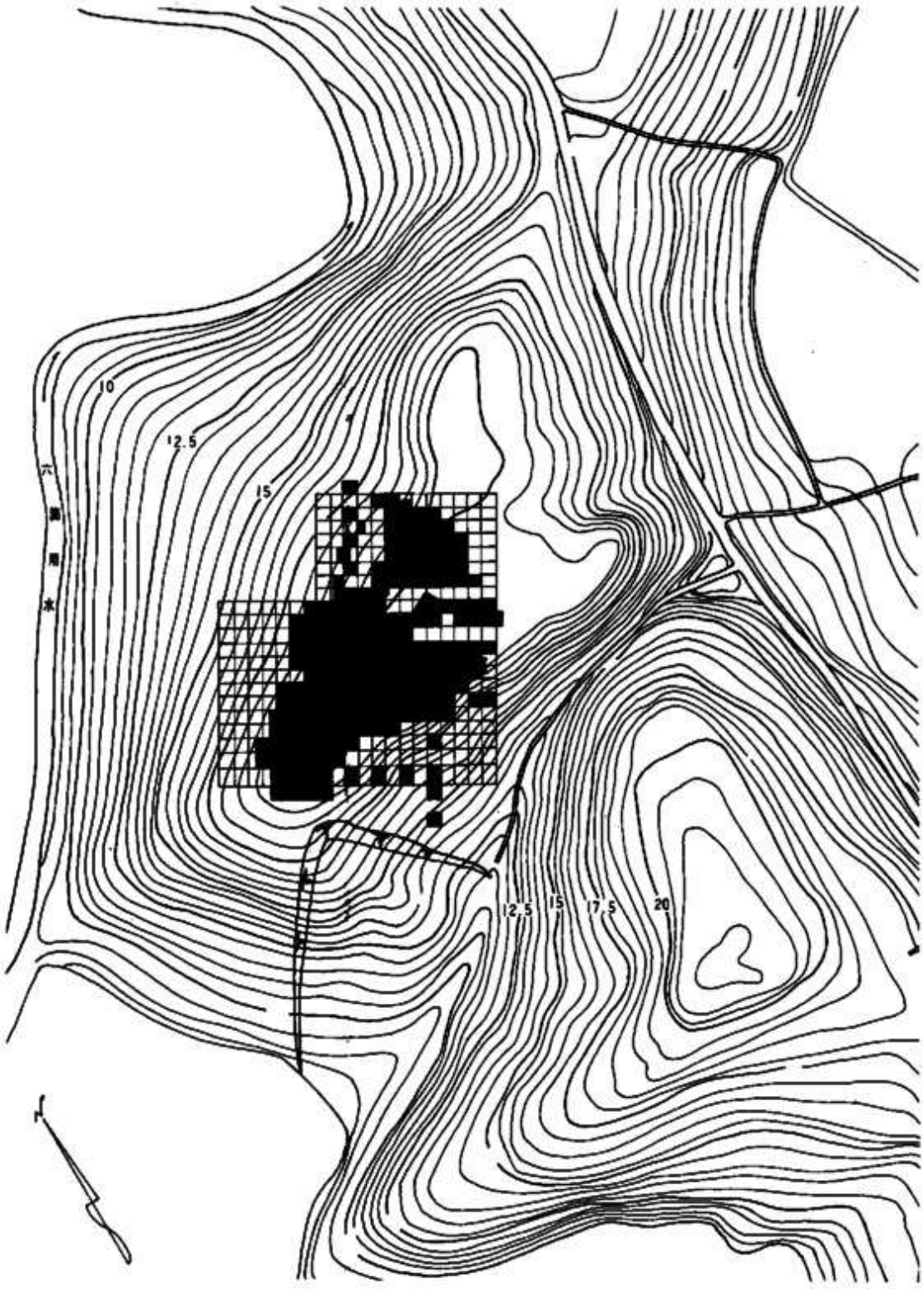




上：第4号土坑、下：第4号土坑鉄剣出土状態。

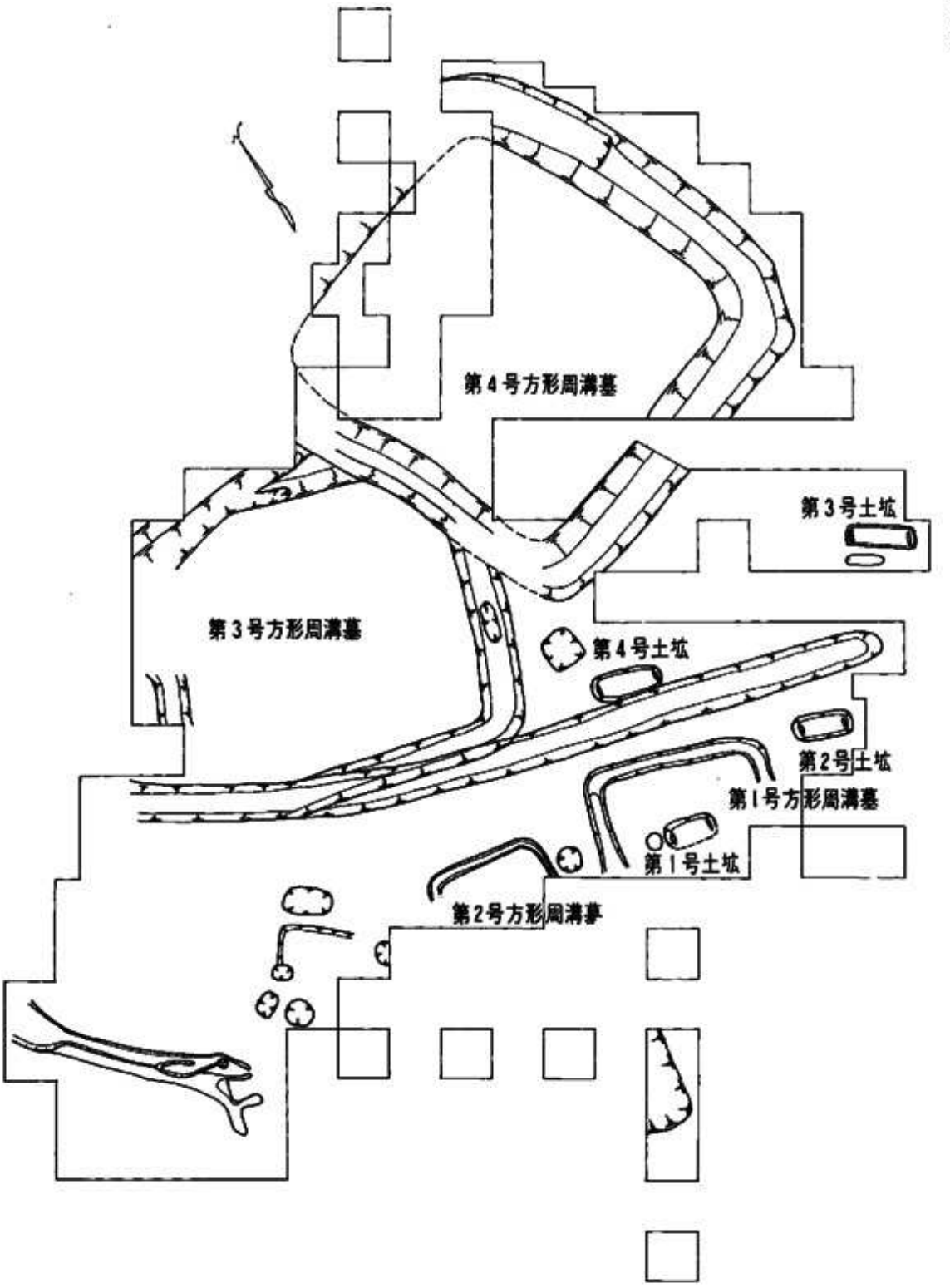
上：第2号土坑ヒスイ製曲玉出土状態、下：第3号方形周溝墓周溝部と、歴史時代溝との切り合い。

上：第4号方形周溝墓周溝内、下：第3号方形周溝と歴史時代溝の切り合いセクション。



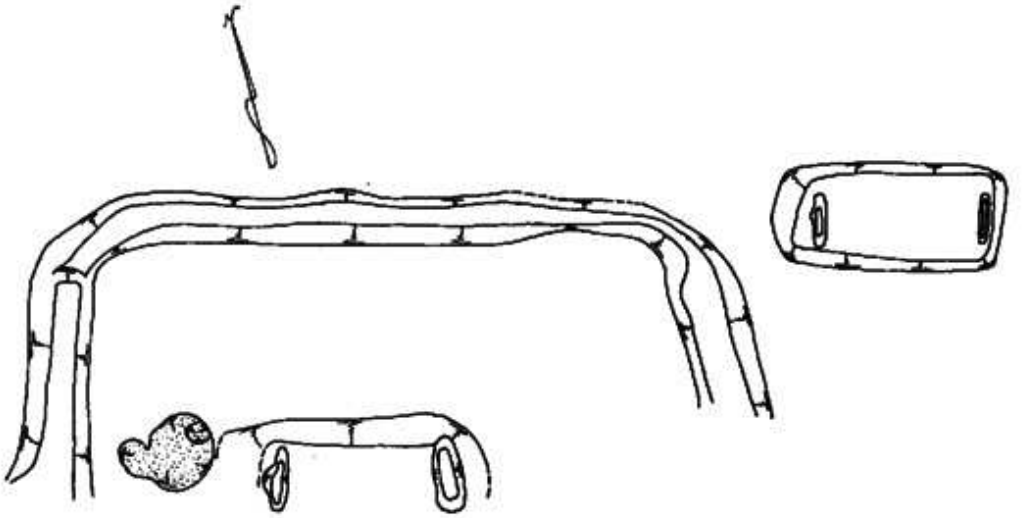
S＝1000：1

地形図

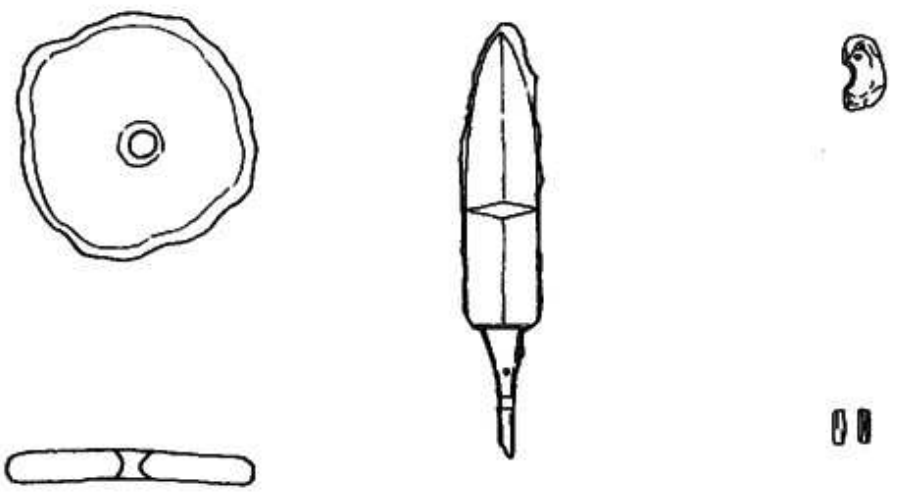


(S=60：1)

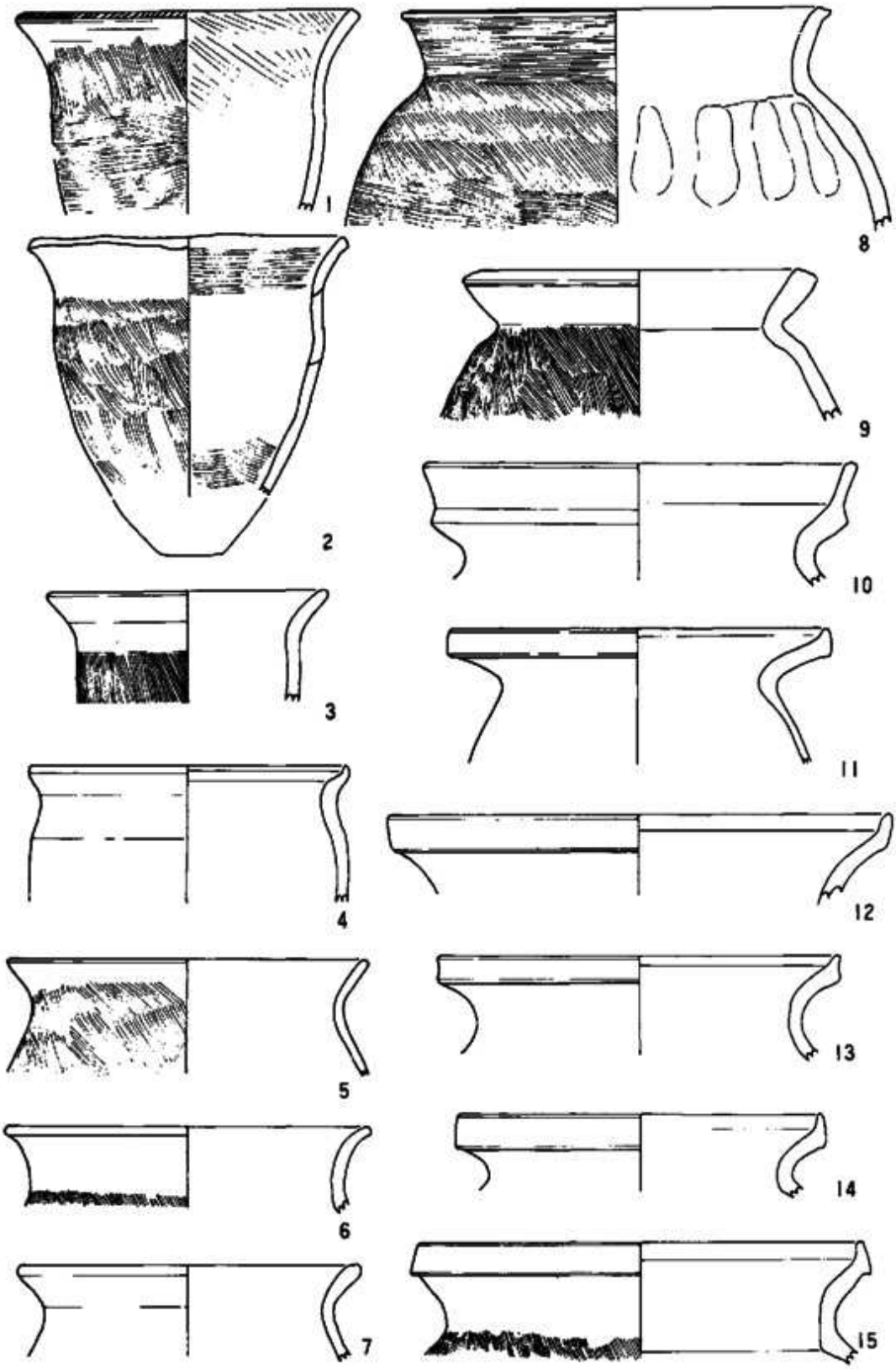
発掘区及び遺構分布図



第1号方形周溝墓　　(S=40：1)

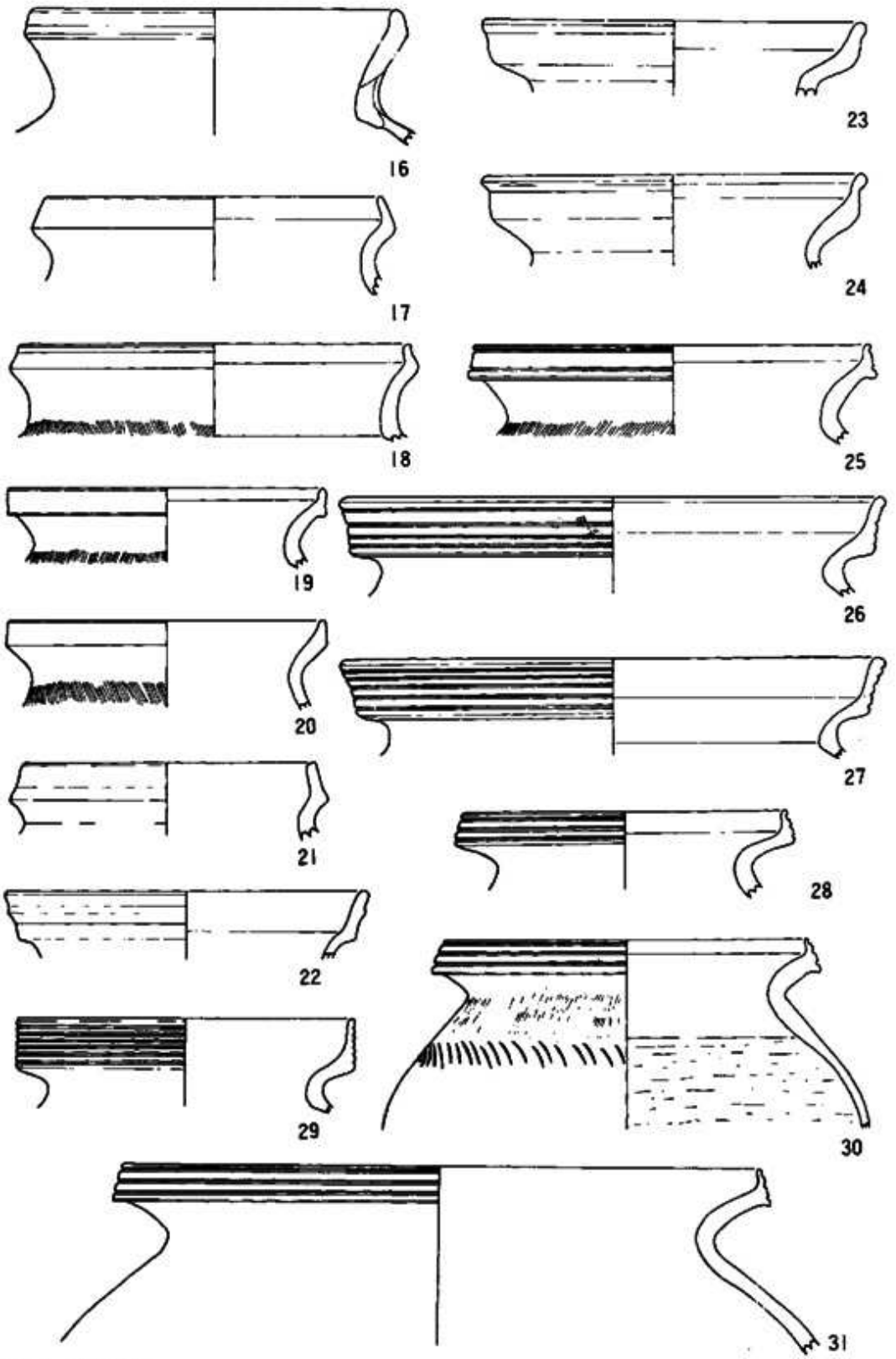


(S=2：1)

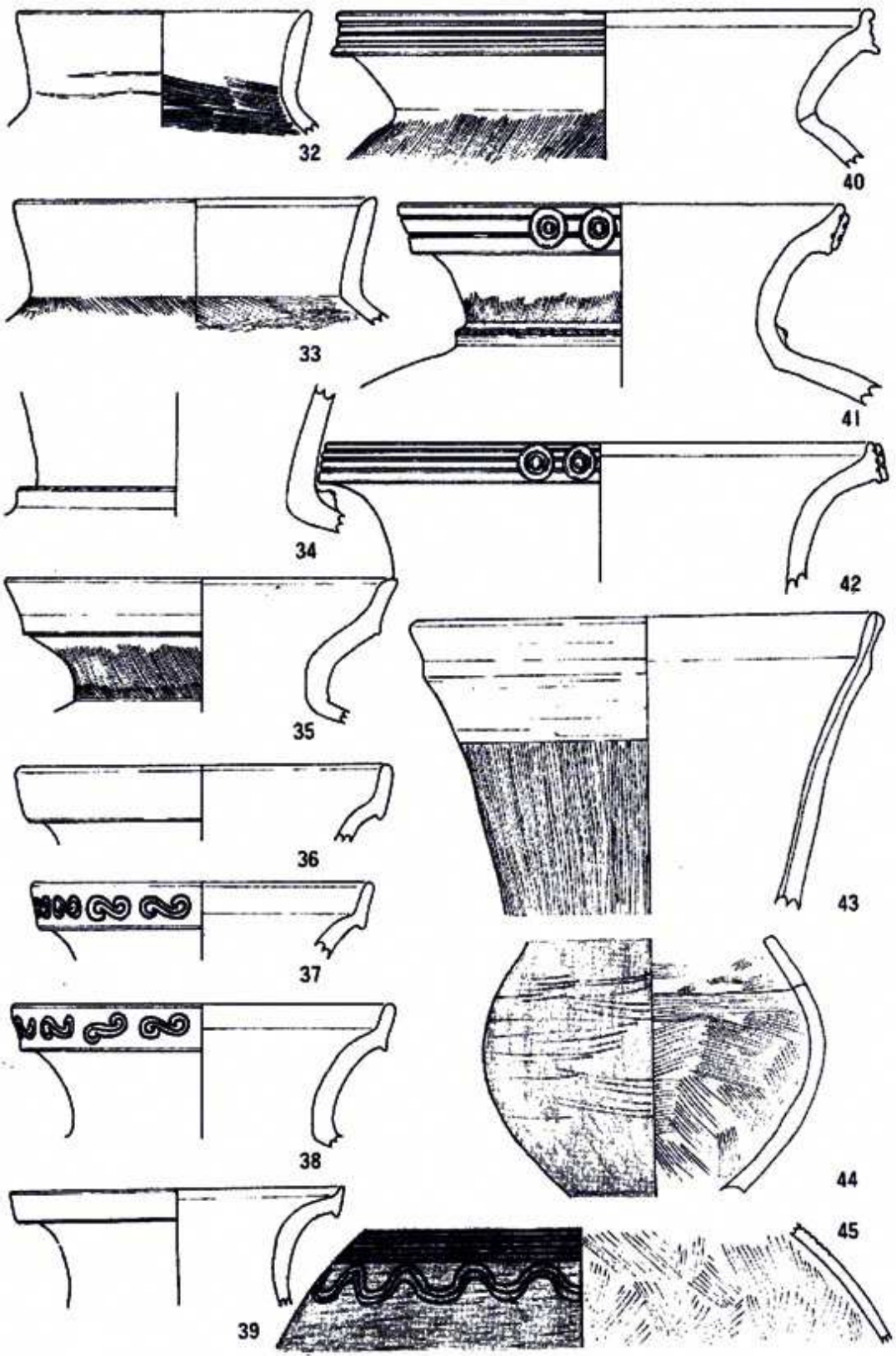


弥生式土器

(S=3:1)

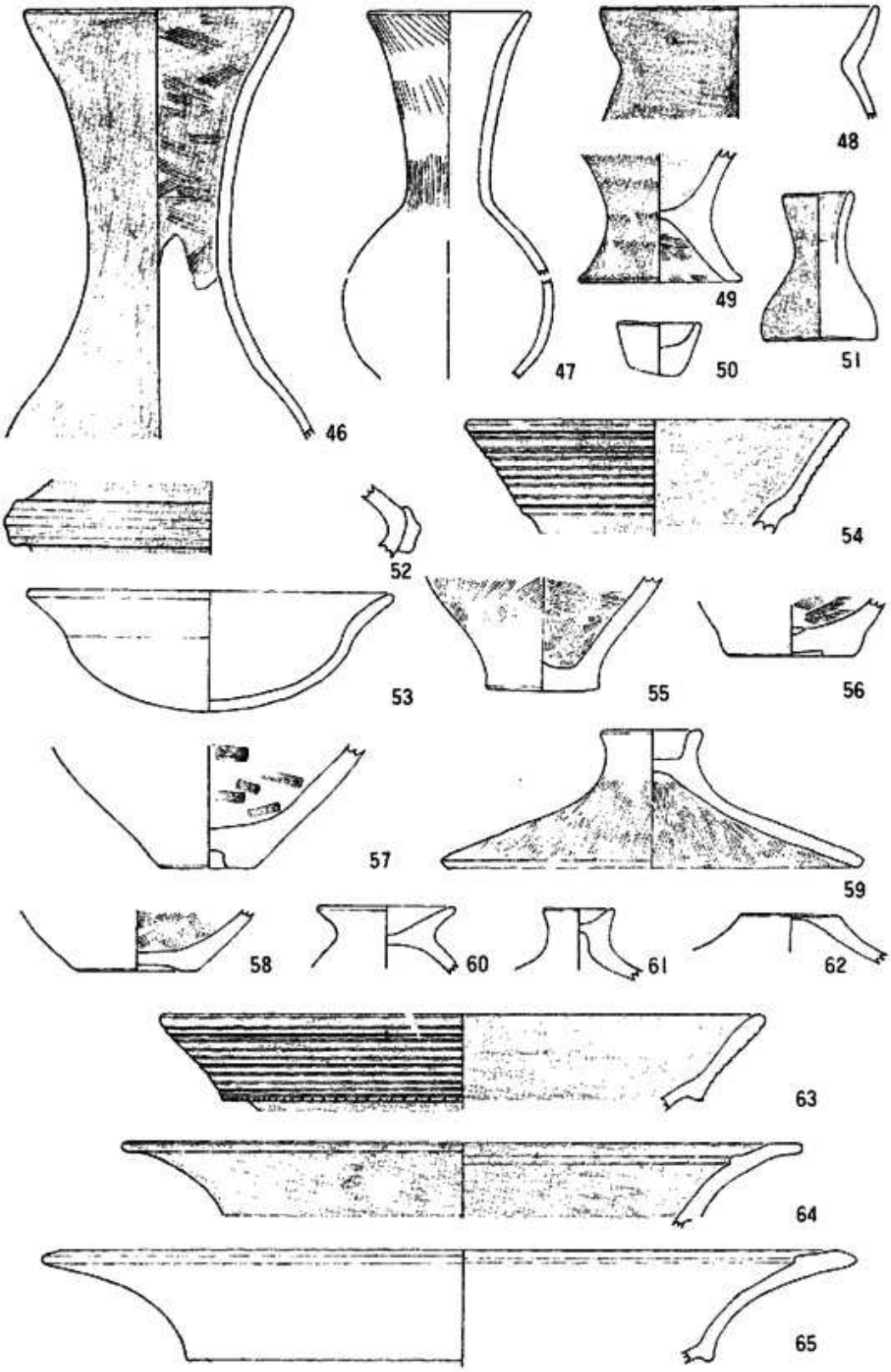


弥生式土器（23・24＝S字状口縁土器）　　（S＝3：1）



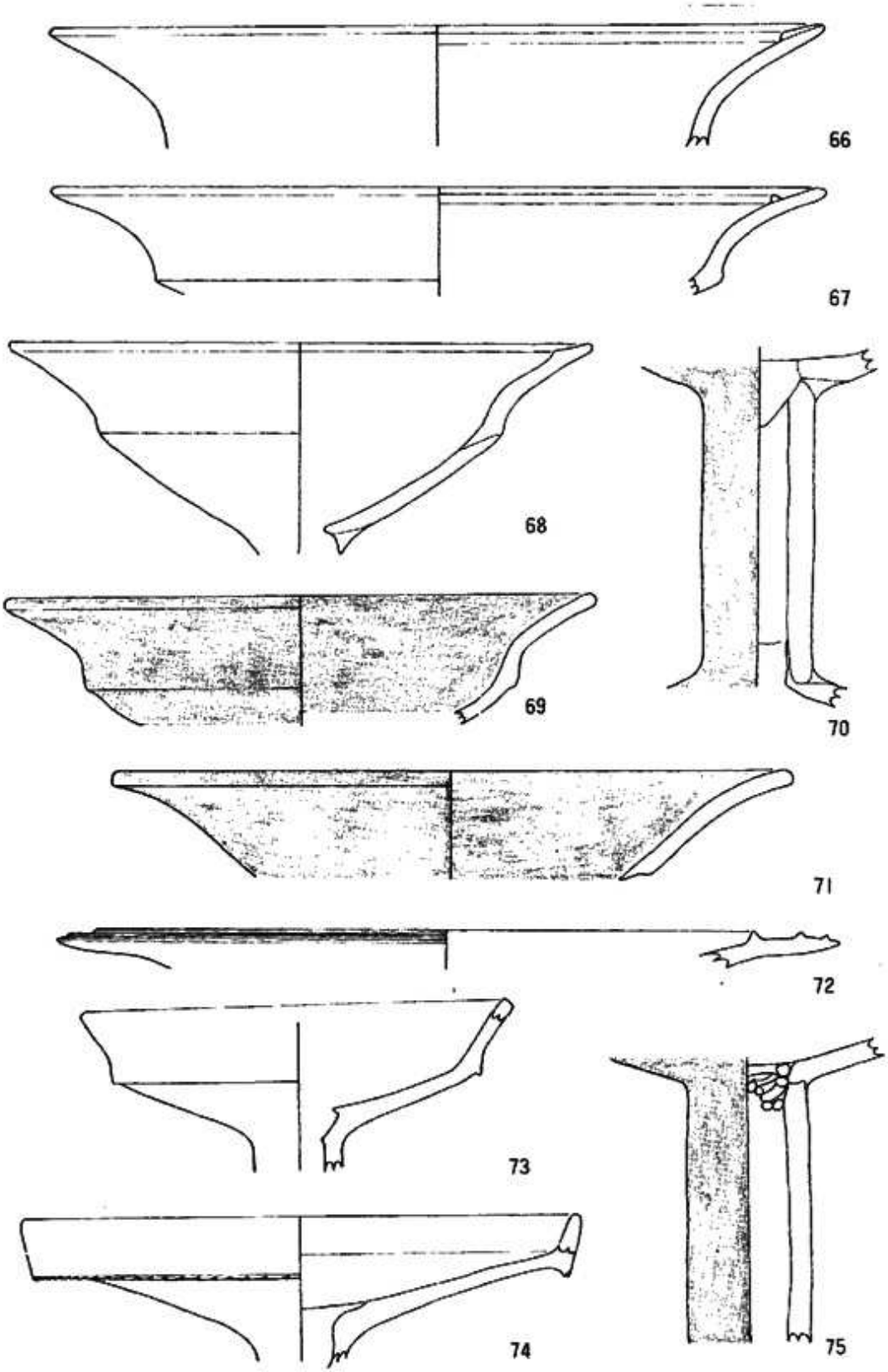
弥生式土器

(S=3:1)



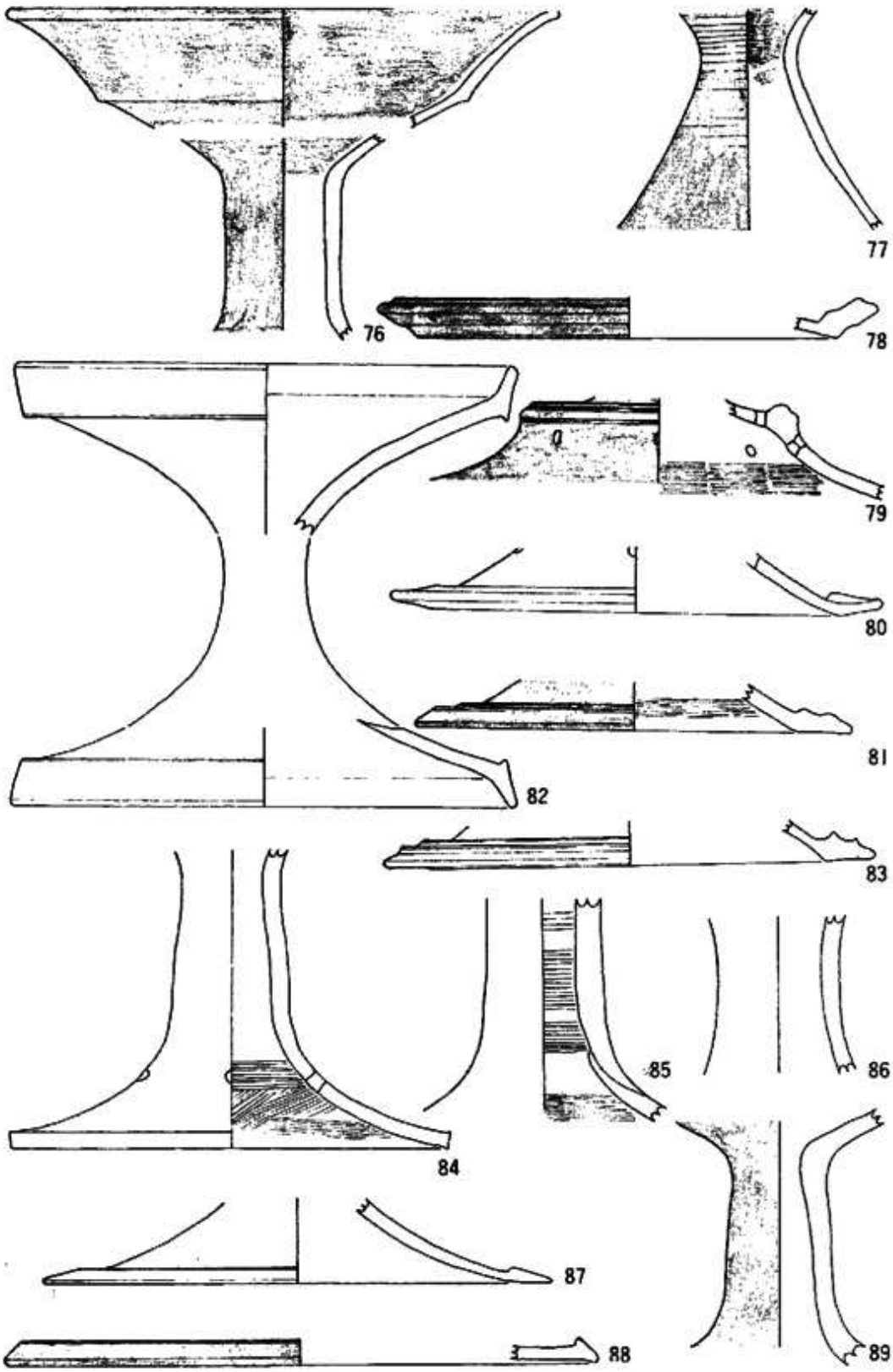
弥生式土器

(S= 3 : 1)



弥生式土器

(S=3:1)



弥生式土器

(S＝3：1)